

10. 呼吸器系の疾患（インフルエンザ、鼻炎を含む）

文献

Ikemiyagi H, Hatakeyama H, Isono Y, et al. Effectiveness of keigairengyoto in patients with chronic rhinosinusitis after endoscopic sinus surgery. *Traditional & Kampo Medicine*. 2023; 10(3): 253-58. DOI: 10.1002/tkm2.1384

1. 目的

内視鏡的副鼻腔手術（ESS）後の細菌感染の制御および慢性鼻副鼻腔炎の治療における荊芥連翹湯の有効性の評価

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験（RCT）

3. セッティング

大学病院（耳鼻咽喉科）1施設

4. 参加者

慢性鼻副鼻腔炎と診断され ESS を受けた患者 22 名。好酸球性鼻副鼻腔炎患者は除外した。

5. 介入

Arm 1: 12 週間の長期低用量マクロライド療法にツムラ荊芥連翹湯エキス顆粒 1 回 2.5g を 8 時間毎に 12 週間経口投与を併用（9 名）

Arm 2: 12 週間の長期低用量マクロライド療法のみ（13 名）

ESS 後 1 週間の術後抗菌薬治療後に、投与開始後 0、7、28、56、84 日目に調査した。

6. 主なアウトカム評価項目

- ・ Sino-Nasal Outcome Test-22（SNOT-22）
- ・ ビジュアルアナログスケール（VAS）を用いた嗅覚検査
- ・ 鼻腔スワブ検体中の細菌の種類とコロニー形成単位（CFU）数（投与開始 0 日目と開始後 84 日目）

7. 主な結果

慢性鼻副鼻腔炎患者 22 名のうち、19 名は細菌性鼻副鼻腔炎で 3 名は真菌性鼻副鼻腔炎であった。両群ともに SNOT-22 の総合スコアと嗅覚検査で改善が認められたものの、3 ヶ月の試験期間中、両群間に有意差はなかった。投与開始後 0 および 84 日目に採取された鼻腔スワブ検体中の細菌数は Arm 2 では 33,125 CFU/mL から 4,317,604 CFU/mL に増加したのに対し、Arm 1 では 3,200 CFU/mL から 102,000 CFU/mL への増加にとどまった。両群の総細菌数の 75 パーセントイル値である 10^4 CFU/mL 超の症例数は、Arm 2 で 7.6% から 53.8% に有意に増加したのに対し（ $P=0.04$ ）、Arm 1 では有意な増加は認められなかった。

8. 結論

荊芥連翹湯は慢性鼻副鼻腔炎の術後治療における細菌増殖抑制に関して有益である可能性がある。

9. 漢方的考察

なし

10. 論文中の安全性評価

記載なし

11. Abstractor のコメント

慢性鼻副鼻腔炎の治療において、薬剤耐性による治療抵抗性が問題となる中で、荊芥連翹湯の抗菌作用や抗炎症作用を明らかにしようとした重要な臨床研究である。しかし、症例数が少ないこと、Arm 1、Arm 2 ともに長期低用量マクロライド療法が施行され荊芥連翹湯単独の効果や投与終了後の経過が評価されていないなどの課題があると考えられた。著者らが指摘するように、荊芥連翹湯とマクロライドを併用することによる相乗効果、ESS 治療前の慢性鼻副鼻腔炎や治療抵抗性の好酸球性鼻副鼻腔炎に対する荊芥連翹湯の有用性に関する研究も望まれる。

12. Abstractor and date

眞木 賀奈子 2025.10.30